

2022年11月13日聖霊降臨後第23主日

マラキ書 3章 13-20 節 b, 23-24 節

テサロニケの信徒への手紙二 3章 6-13 節

ルカによる福音書 21章 5-19 節

本日のぶどうの木の礼拝は、子どもの祝福式を行いました。従来でしたら、「こどもとともにささげる聖餐式」の中で行うのですが、まだ別々で行うこととなりました。そのような行事がある2022年も、残すところ2カ月を切りました。来週は、降誕節前主日、教会の暦の上では、来週で一年が終わります。そのことのしるしであるかのように、新しい「聖公会手帳」とカレンダーが届いております。また、来週は礼拝後、クリスマスに向けたミニバザーを行います。クリスマスの準備の一つとして、交わりのひと時を持ちたいと思います。

さて、本日の聖書日課に共通しているテーマは、「終わり」です。旧約日課は「マラキ書」ですが、この文書は、3章しかない短い預言書であり、正典の『聖書(旧約)』では最後に位置しています。日課として選ばれた理由は、最後だからではなく内容からだと思いますが、この文書の内容をおおまかに言うと次のようになります。

はじめに神の民、イスラエルに対する批判が書かれています。主なる神様は、イスラエルを愛しているにも関わらず、イスラエルは、神殿祭儀と律法をおろそかにし、神様に対して不満を語り、神様に対する熱心さに欠けてしまったのです(マラキ1章)。次に、「祭司たち」に厳しい批判があり、結婚を題材としたイスラエルへの批判ののち(マラキ2章)、そのようなイスラエルに、恐ろしい審きの時、終わりの時である主の日がおとずれることが告げられます。ただし、その日の目的は、イスラエルを精錬するため、彼らが立ち返るためです(マラキ3章)。本日の日課は、この終わりの日に関する部分になります。

この「マラキ書」は、成立年代や著者は詳しくわかっていません。しかし、内容から推測して、バビロン捕囚以後に書かれたと推測されます。バビロン捕囚後、イスラエルは神殿を再建し、まとまりを回復するのですが、ある程度平和になると再び主なる神様から離れてしまったようです。「マラキ書」は、その頃書かれ、それまでのイスラエルの歴史を振り返っているのです。

このような主なる神様とイスラエルとの歴史は、親子関係に置き換えると、分かりやすくなります。この「マラキ章」がまさにそのような描き方をしています。1章6節は「子は父を、僕は主人を敬うものだ。しかし、わたしが父であるなら、わたしに対する尊敬はどこにあるのか」とある通りです。

主なる神様は、厳しい親なのですが、子どもであるイスラエルがかわいく

て仕方がないのです。そして子どもであるイスラエルは、その親の気持ちや愛を、理解しつつも、いつも勝手なことばかりして、間違をくりかえします。そして、困難に直面すると、そのたびにこれが最後のお願いと言わんばかりに、主なる神様に助けを求め、主なる神様は、最後にはいつも助けてしまうのです(といっても、王国は二回崩壊しています)。そのような親である主なる神様の姿は、本日の3章23節、24節にも表れています。

「見よ、わたしは大いなる恐るべき主の日が来る前に、預言者エリヤをあなたたちに遣わす。彼は父の心を子に、子の心を父に向けさせる。わたしが来て、破滅をもってこの地を撃つことがないように」。

主なる神様は、恐るべき主の日が来ると、イスラエルを脅かしているのですが、イスラエルが破滅しないように、預言者エリヤを遣わすと逃げ道を設けています。この逃げ道を、賢い子どももあるイスラエルの人びとが見逃すわけでもありません。イスラエルの人びとは、このエリヤの部分から、自分たちが困難なことに直面した時、預言者エリヤが来て助けてくれると期待するようになりました。そして、その期待は、従来からあるメシアへの期待と結び付いて、自分たちが本当に困っているときに、自分たちには、メシアを通じて決定的な助けが訪れる、具体的な前触れとしてエリヤが再来するという信仰へと発展していきます。

主なる神様が求めたのは、自分の愛に応えるしるしとして、神殿祭儀をしっかりと行い、律法をしっかりと守ることでした。しかし、イスラエルの人びとは、神殿祭儀や律法を行いつつも、心は揺れ動き、また誰がエリヤで、いつそれがくるのか、そのことに関心も集中したのです。もちろん、すべてのイスラエルの人々がそうであったわけではなく、多くの人々は神殿祭儀があるときは、規定通りにそれを行い、またファリサイ派のように律法を真剣に実行している人々もいました。しかし、王や宗教的な指導者たちの墮落から、総体としてのイスラエルは、エリヤ待望、メシア待望を持ちつつ、主なる神様の愛に応えているとはいえない状態でした。

エリヤ待望は、イエス様の時代にも存在し、福音書の物語には、イエス様がエリヤだと思われた場面もありました。しかし、教会にとって大切なのは、イエス様が決定的な救いをもたらす救い主であり、世の終わりが到来するとき、その救いが完成するという信仰です。この世の終わりという事柄が関わる信仰が、今日の使徒書と福音書にも関連しています。

今日の使徒書の3章6節に「怠惰な生活をして、わたしたちから受けた教えに従わないでいるすべての兄弟を避けなさい」というパウロの言葉があります。また、3章10節に「実際、あなたがたのもとにいたとき、わたしたちは、『働きたくない者は、食べてはならない』と命じていました。」ともあります。これは20世紀初頭に誕生し、歴史に影響を与えたイデオロギーを提唱した、「例の人」の「働かざるものは食うべからず」という言葉の元とな

ったといわれています。これらの言葉は、世の終わりという事柄と合わせて考えなければ、誤解を招きます。ただし、先週も述べました通り、「テサロニケの信徒への手紙二」は、真性のパウロの手紙か否かで意見が分かれます。それゆえ、その違いは背景への考察、また解釈に影響しますが、わたしは真性のパウロの手紙だと考えます。つまり、この手紙を、パウロが世の終わり・終末は近いと考えていたころに書いたと考えます。

熱心な宣教活動を続けるパウロは、はじめは終末の到来が近い、その世の終わりの時に、救いが完成すると考えていました。もともと律法学者であり、真面目なパウロは、その世の終わりの時まで、それまでの自分の仕事をおこない待つように勧めていました。しかし、教会に新しく入った人々の中には、同じように考えない人もいたのです。つまりイエス様を信じて、救われたのであれば、また救いが完成するのが世の終わりが近いならば、働かなくても、何もしなくても、それでいいのではないか考える人もいたようなのです。イエス様を信じるだけで救われること、そして世の終わりが近いこと、両方ともパウロが教えた事柄であり、間違いではなりません。それ故、パウロは、そのような人々を、厳しく批判することも、否定することもできず、ただ「(そのような) **すべての兄弟を避けなさい**」と他の人々が影響されないように語るほかありませんでした。

この「**避けなさい**」という言葉は、直訳が難しいのですが、「(そのようなすべての兄弟)からあなた方を(離れて)自らを置くこと(をしなさい)」となります。以前の「口語訳」では「遠ざかりなさい」となっていました。「避けなさい」でももちろんよいのですが、「距離を置く」と訳してもよいと思います。いずれにしても、教会の中で、ある人たちと距離置きなさいというのは、いかななものかと思えますが、そのような人たちを、兄弟姉妹ではないと切り離すこともできないパウロが、熟慮した末の言葉といえます。

それでは、終末の到来が遅れている、世の終わりがそれほど近くはないかもしれない、そのように自覚し始めたころのパウロは、これらの事柄(課題)についてどのように考えたのか、この問いに関する直接的な答えはありません。推測するしかないのですが、わたしは、パウロが『聖書(旧約)』の主要なる神様と同じように、ある程度厳しく諭しあるいは批判はするものの、どのような人とも、兄弟姉妹としての関係を超えることを継続して大切にしたいと思えます。パウロと同じように生活する人のみが集まるような教会を、形成することはなかったと思えます。そして、愛から自発的に促される行いを重要視しつつも、「信仰」という事柄を中心に教えを形成するようになったのだと思えます。

今日のルカ福音書の物語も、小黙示録とも呼ばれる箇所であり、世の終わりについての事柄が記されています。そしてその背景には、成立したばかりの教会をめぐる歴史的出来事が反映していると考えられます。その一つに、

ローマ帝国による迫害があります。ただし、帝国からの本格的な迫害はまだ行われていません。おそらく64年の皇帝ネロによる迫害であると思います。その迫害は、信仰を理由にした迫害ではなく、正当な理由のない迫害でした。パウロやペトロなど主だった使徒たちもこの時に殉教したと思われます。もう一つは、ユダヤとローマ帝国が戦ったユダヤ戦争です。その戦争でユダヤは敗れ、神の家であるエルサレムの神殿も陥落し、焼け落ちます。「**あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る**」(ルカ 21:6) というイエス様の言葉は、このことと関連していると思います。そしてこの戦争に、キリスト教徒となったユダヤ人は加担しなかったので、同胞からは裏切り者として批判され、憎まれました。「**また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる**」(ルカ 21:17) というイエス様の言葉は、このことを示していると思います。

イエス様の十字架と復活の後起こった出来事である、教会への迫害と、ユダヤ・イスラエルとローマ帝国との戦争、イエス様が、それらをどこまで予期していたかわかりません。しかし、イエス様は、どのような状況の中であって、主なる神様への信仰を失うこともなく、守り続けることを求めています。それは、主なる神様を信じる人がいる限り、本当の救いと命と平和が、この地上にもたらされる希望が、この世界に残り続けるからです。

しかし、イエス様は、ただそのことを厳しく求めているわけではありません。「**あなたがたの髪の毛の一本も決してなくならない。忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい**」(ルカ 21:18-19) とある通り、主なる神様は、信じる人、一人ひとりを、その髪の毛一本に至るまで分かってくださっていると、約束して下さっているからです。そして、何があったとしても、そのあとに本当の命を歩むことになるかと語っているからです。

昨年までと異なり、今年是我したちの国の周りでも、戦いの準備を進めているところがあります。それゆえ今は、わたしたちの国の周りで、争いあうことが起こらないように祈ることも必要です。しかし、今世界の各地で起きている争いが、一日も早くを終結することを願い続けることが、もっとも大切です。しかし、残念ながらわたしたちの願い通りにならなかったとしても、戦いや混乱が、すべての終わりではないことを、イエス様の言葉を通して、今日、改めて確信したいと思います。

もうすぐ、2022年も終わります。しかし、すべての終わりは、何かの始まりです。たとえ、この世界の終わっても、この世界の命が終わっても、それが本当の平和と命の始まりであることをイエス様は、十字架と復活を通して示して下さいました。そのことをわたしたち自身の希望として、これからもご一緒に、わたしたちの交わりを通して、世界に示していきたいと思ひます。そして、そこからまことの平和を求めることの大切さを示していきたいと思ひます。